



日本SPF豚協会だより

2019. 7
No.76

特集

日本SPF豚協会、これまでの50年、これからの50年⑤

協会50年、これまでとこれから

一般社団法人日本SPF豚協会

前副会長 **鈴木 保**



日本SPF豚協会創立から50年が経過しました。記念の年にあたり長年関わった者の私見として記述させていただきます。まずは多大なる苦労と貢献をされた各ピラミッドおよび協会関係者の皆様に、感謝と「おめでとう、ご苦労様でした」と言わせていただきたい。

私は約40年間SPF豚産業の様々な現場に携わってきました。それは生産や経営のみならず、研究や学術分野など幅広い範囲に及びます。当初は蔓延疾病の対象はARやSEPなどの細菌であり、育種や繁殖においては科学的なアプローチが進んでおりませんでした。私がSPF環境下で育種を進めるにあたり、最も早く取り組んだのは人工授精(AI)でした。品種改良や品種間交配の試験をするのに、自然交配では無理があったためです。もちろん種の保存の問題もありました。多くの悩みを抱えていた私は、あるセミナーで当時の静岡県中小家畜試験場の曾根勝先生との出会いで一変しました。曾根先生は実に実践的な豚人工授精方法を確立されており、我々同様受精卵移植に取り組まれている最中でもありました。それをきっかけに人工授精に関わる様々な研究に取り組みました。凍結保存はもとより精液の輸送、雌雄判別、分離に至るまで、多くの研究機関を巻き込んで実施しました。もっとも印象深かったのは、その過程で丹羽太左衛門先生の晩年期と一緒に仕事ができただけでなく、当時ほとんど利用されなかったAIが、宅配輸送の急速な発展とともに、現在では一般的な技術になったのは感慨深いものがあります。特にSPF豚の育種には欠かせない技術となりました。

SPF化するための手法として受精卵移植術は確立し、MEW法による疾病排除も試験のみならず実践もしまし

た。その間協会が取り組んできた防疫・衛生管理がSPF認定農場に限らず中・大規模農場では当たり前の管理となり、協会が果たした業界に対する貢献がとても大きいことを実感しています。養豚業と言うと3K(きつい、汚い、臭い)の代表の様に扱われていましたが、農場内専用作業服を着用し出入りには体をシャワーで清潔にするSPF管理は、作業者の意識も大きく変革させました。ただし、工事業者の皆さんには面倒がられました。

現在ではHACCP認証農場も増加していますが、生産プロセスのリスク管理だけではなく、結果について、臨床、と体、生産成績も評価し、設備基準まで定める協会認定規則は、国際的にみても卓越したユニークなシステムだと思います。

近年の育種進歩は凄まじく、並行して豚舎環境整備も進んだことから産子数、発育速度、飼料要求率など生産性が著しく改善し、同じ種の「豚」とは思えない程進化を遂げました。その中でSPF環境は重要かつ一つの方向性を打ち出したと言えます。蔓延疾病の対象が当初の細菌からウイルスに移行し、更に複合的にはなりましたが、防疫方法の基本は何も変わることはありません。育種についてはゲノム解析が進むに従って、生産性や肉質のみならず抗病性についても選抜に取り入れられるようになるでしょう。また性判別授精が進むと生産体制が一変することにもなり、人でのiPS・ES細胞利用が大きく進み、異種間を含む再生医療が発展し、豚の利用も急速に拡がるのが容易に想像できます。その際には実験動物とは別次元のSPF管理と、医療用豚の生産管理が、産業として求められるようになるのでしょう。

協会創立50周年 記念セミナーを 開催します

9月5日(木)

東京・KKRホテル東京



すでにご案内の通り、日本SPF豚協会は今年秋、創立50周年、設立(法人化)15周年、SPF豚農場認定制度発足25周年という、大変大きな節目を迎えます。協会では2年前より準備委員会を設置、記念事業推進のため、準備を進めてきました。

また、事業推進のための協賛金も広く募集し、多くの皆様のご協力をいただくことができました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

このたび、毎年秋に開催しておりますSPF豚セミナーにあわせ、50周年記念セミナーおよび祝賀会を9月5日(木)、東京千代田区「KKRホテル東京」にて開催することといたしました。

セミナーは2部構成とし、第1部は通常セミナー部分です。毎年恒例の認定CM農場の生産成績年次報告を事務局より報告いたします。

また、こちらも毎年恒例の生産成績優秀CM農場表彰式も執り行います。一貫農場において3年間の総合生産成績の平均値がもっとも高い農場を「総合生産成績最優秀農場」として、また同じく3年間の平均値で1母豚あたりの年間肉豚出荷頭数が最も多かった農場を「商品化頭数最優秀農場」としてそれぞれ表彰、表彰状とトロフィーを贈呈いたします。

第2部は記念セミナーと祝賀会となります。来賓祝辞に続いて、赤池洋二・協会最高顧問に記念講演をお願いいたしました。わが国におけるSPF養豚の始まりから現在まで、当初からSPF養豚に携わり、協会設立・存続の第一の功労者である赤池顧問に50年のあゆみを振り返っていただきます。

続いて、基調講演としてSPF豚肉の今後の展望について、中京学院大学の仲川直毅先生にご講演いただきます。先生は食肉流通がご専門の研究者で、SPF豚肉の今後について、分析・考察いただきます。

2つの講演の後には祝賀会となります。KKRホテルのご協力のもと、認定農場産SPFポークを使った和・洋中の豚肉料理をふんだんにご用意します。それぞれの専門シェフにSPFポークの素材の良さを生かしつつ、様々な部位を用いたメニューをお願いしました。豚肉は各地の会員認定農場にご協力をお願いし、ご提供いただきます。SPFポークを思う存分ご堪能ください。

参加ご希望の方は、協会ホームページをご覧の上、FAXまたはメールにてお申し込みください。

なお、記念事業にご協賛いただいた方々には別途ご案内をお送りいたします。

多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

日本SPF豚協会創立50周年・法人設立15周年 記念セミナー・祝賀会

開催日時：令和元年9月5日(木) 13:00～19:00

場 所：KKR HOTEL TOKYO (東京都千代田区大手町1-4-1) 10階「瑞宝の間」

<第1部> セミナー

- | | |
|--|-------------|
| 開会のあいさつ | 13:00～13:05 |
| 1) CM認定農場生産成績年次報告(2018)
藤田世秀・日本SPF豚協会専務理事 | 13:05～13:20 |
| 2) 生産成績優秀CM農場表彰式 | 13:25～13:55 |
| ① 選考結果報告・講評 | |
| ② 総合生産成績最優秀農場表彰 | |
| ③ 商品化頭数最優秀農場表彰 | |

<第2部> 記念セミナー・祝賀会

- | | |
|---|-------------|
| 会長あいさつ | 13:55～14:00 |
| 来賓祝辞 | 14:00～14:10 |
| 1) 講演「わが国におけるSPF養豚の始まりから現在まで」(仮題)
講師：赤池洋二・協会最高顧問 | 14:10～15:20 |
| 2) 基調講演「SPF豚の今後の展望」(仮題)
講師：仲川 直毅・中京学院大学経営学部専任講師 | 15:30～16:30 |
| 3) 祝賀会 | 17:00～19:00 |

<参加費>

セミナー：無料 祝賀会：5,000円

<申込期日> 8月27日(火)

※定員(180名)になり次第締め切らせていただきます。

<お申込み・お問い合わせ>

日本SPF豚協会ホームページ <http://www.j-spf.com/>

メール：j.spf.a@nifty.com

FAX.03-5835-5376

TEL.03-5835-5375

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 1-8-2

ニューセンチュリービル7F TEL.03-5835-5375

KKR HOTEL TOKYO

<http://www.kkr-hotel-tokyo.gr.jp/000/access.html#station>



豚痘は、豚痘ウイルスの感染により引き起こされる豚の皮膚疾患です。

原因ウイルス

豚痘ウイルスは、ボックスウイルス科コルドボックスウイルス亜科スイボックスウイルス属に分類されています。豚痘ウイルスのゲノムは直鎖状、2本鎖DNAです。

病態

豚痘は、日本を含め世界各国で散発的に発生が確認されています³⁾。発生は秋に多くみられます。特徴的な皮膚病変(発痘)が主で、多くの罹患豚は自然治癒しますが、成長が遅れ経済的損失が生じます。潜伏期間は通常4~14日で、全経過は30~45日と考えられています。

発痘は全身にみられ、好発部位は下腹部、内股部、腋窩部及び耳翼で、ブタジラミの寄生部位と一致します。発痘は、発赤、丘疹、水疱、膿疱、痂皮形成及び落痂の経過をとります。

肉眼的に、丘疹は直径3~20mm、不整円形、白~淡赤色を呈します。病変の中心部は陥没し痂皮の形成(いわゆる痘臍)がみられます。舌にも同様の病変がみられることがあります。

病理組織学的に、表皮では有棘細胞層の著しい肥厚、有棘細胞の風船様膨化、有棘細胞の核の空胞化及び好酸性の細胞質内封入体などの豚痘特有の所見が認められます¹⁾。豚痘ウイルスに対する特異抗体を用いた免疫組織化学的染色では、皮膚の細胞質内封入体に一致して、豚痘ウイルス抗原がみられます。

透過電子顕微鏡検索では、細胞質内封入体が認められた皮膚の有棘細胞の細胞質内に、特徴的なボックスウイルス粒子がみられます。大きさ約300nm×200nmの成熟ウイルス粒子(図)や一層の表層膜を有した未熟なウイルス粒子が観察されます。

病変部に細菌の二次感染を受けた場合は病状が悪化します。汚染農場では、日齢に関係なく軽度の発症と治癒が長期間繰り返されます。

確定診断

診断には、臨床観察、剖検、血清学的検査、病理組織学的検査及びウイルス学的検査を実施します。豚痘ウイルスに起因する好酸性細胞質内封入体を含む組織病変の確認が重要です。

表皮有棘細胞の細胞質内封入体は、初期病変もしくは混合感染時にはHE染色で識別しにくい場合があります。このような場合には豚痘ウイルス抗原を検出する免疫組織化学的検索が有用です。また、皮膚病変部から抽出したDNAを用いたPCRによる豚痘ウイルス遺伝子の検出も迅速診断として有用です⁴⁾。豚痘ウイルスは豚由来細胞でよく増殖するため、ウイルス分離も容易です。これらの方法は豚痘ウイルスの検出率が非常に高いため、広く普及し、多くの事例で用いられています。

近年、日本では先天性豚痘が散発していることがわかってきており、十分な注意が必要です^{2~5)}。先天性豚痘は、母豚で低レベルの豚痘ウイルス血症が起こった後に、胎子に経胎盤感染して発症します。先天性豚痘では、同腹産子の一部の個体が発症し、死亡しますが、母豚には臨床的な異常はみられません。先天性豚痘の症例で胎盤に豚痘ウイルス抗原が確認されています。

現在、新しいワクチン開発のツールの一つとして豚痘ウイルスが注目されています。豚コレラウイルスや豚流行性下痢(PED)ウイルスなどの病原因子の一部を豚痘ウイルスに発現させ、このウイルスをウイルスベクターワクチンとして利用することが試みられています⁶⁾。

伝播と予防



豚痘は、接触感染もしくはブタジラミやサンバエなどの昆虫による機械的伝播により感染します。若齢豚は感受性が高く、群内で感染が広がりますが、母豚では単独の発生で軽度な症状しか確認できないことが多くあります。

予防として飼養衛生管理基準の遵守が重要になります。豚痘に対するワクチンは市販されていません。発症豚は健康豚から隔離し、伝播動物の駆除と併せて豚舎消毒を行い、豚舎の換気改善し、密飼いを避けるなどの飼養管理の改善が必要です。

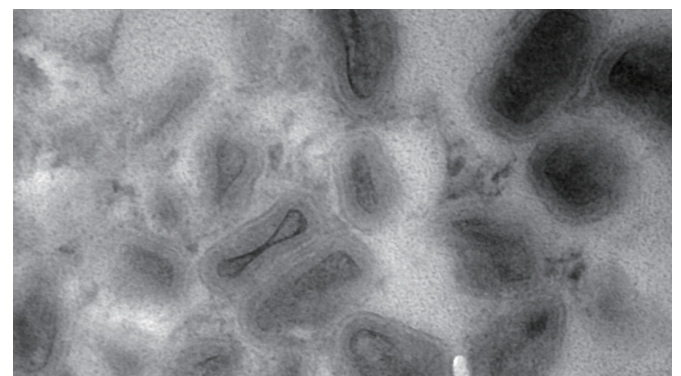


図 豚皮膚の透過型電子顕微鏡像：約300nm×200nmの成熟ウイルス粒子がみられる。(Bar=200nm 酢酸ウラン・クエン酸鉛二重染色)

ブタのウイルス病

連載 No.21

豚痘



農研機構動物衛生研究部門
病態研究領域病理ユニット上席研究員
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻客員教授
芝原友幸

参考文献

1. 井口ら, (2015) 豚病会報, 66: 26-29.
2. 是枝ら, (2013) 日獣会誌, 66: 468-473.
3. Mech P, et al., (2018) Virusedisease, 29: 395-399.
4. Medaglia MLG, et al., (2015) J Virol Methods, 219: 10-13.
5. 下田ら, (2015) 家畜診療, 62: 165-171.
6. Yuan X, et al., (2018) Vet Res, 49: 14.

連載

種豚の能力を最大限発揮させるための飼養管理、栄養管理のポイント



生時体重を大きく、 死産を減らす

中部飼料(株)研究技術部養豚グループ 石川靖之

種豚の繁殖改善が進む中、生産現場で悩んでいるのは死産数増加ではないでしょうか。弊社農場でも多産系と呼ばれる種豚は1回の分娩で20頭以上出産する個体も何頭も見られるのですが、全て生存しているのではなく、ひどいと総産子の半分が死産というケースもありました。総産子数増加＝離乳頭数増加につながっているのは間違いないのですが、その分以前よりも死産数増加となっているのも事実です。また、総産子数の多い母豚の子豚は生時体重が小さい傾向にあります。生時体重を大きくし、死産数を減らしたいのは現場に従事している人の共通課題だと思います。そこで今回は生時体重や死産についてお話ししたいと思います。

まず生時体重ですが、母豚のお腹の中で胎子は妊娠後半に大きく成長します。分娩1ヵ月前ぐらいから妊娠期飼料の増量を行うのはそのためであり、この時母豚の乳腺、子宮も発達していきます。この頃与えられる栄養の大半は胎子と乳腺等に注がれるため(図1)、母豚のお腹の中にしっかり胎子が入っていると母豚のバックファット(P2)の増加は少ない傾向にあり、給与量を増やしているにもかかわらずバックファットが痩せていく個体もいます。また反対にボディコンディションが太い場合、生産現場では妊娠後期の給餌量をあまり増やさない傾向にあると思います。増量できないと胎子の成長や母豚の乳腺等の発達は不十分となります。太っている母豚については妊娠中期(種付け後30～84日目)の給与量を減らして、妊娠後期でいくらか増量できるようにボディコンディションを

調整していくことをお勧めするとともに、妊娠後期の栄養が生時体重に大きく影響を与えるため、給餌量を増やすことをお勧めします。次に、分娩舎へ移動してから分娩までの栄養管理についてですが、この時期母豚は授乳に向けて乳生産が活発になります。乳生産に必要なのは水分です。水分は大腸で吸収されるため、糞に含まれる水分はどんどん低下していきます。分娩前の母豚がコロコロの硬い糞を排せつするのはこのためです。また、成長する胎子によって腸が圧迫され、蠕動運動が抑制され便秘発生につながっていきます。さらに、腸内に滞留する便によって産道がせまくなり、結果、分娩時間が超過し死産増加の要因となっています。これらを改善するために重要となるのは、まずは水分摂取です。積極的に水が摂取できるようピッカーの流量をご確認ください。海外では1分当たり3リットル必要、という話もあります。少なくとも1分当たり1リットルは必要でしょう。分娩前の水分摂取の機会が増えれば便秘解消、初乳生産増加が期待できます。そして分娩舎へ移動した母豚に対しては授乳期用飼料を給与するケースが多いと思われます。授乳期用飼料は妊娠期用飼料よりも粗蛋白質、TDNとも高い傾向にある分、妊娠期用飼料よりも繊維が少ない傾向にあります。海外ではこの時期に繊維を多給することで便秘解消や死産数改善につながっていると報告もあり(表1)、分娩前の母豚への繊維供給として、ビートパルプやフスマなどの給与が改善につながる可能性があります。

図1 母体組織と胎子組織の栄養摂取の優先度

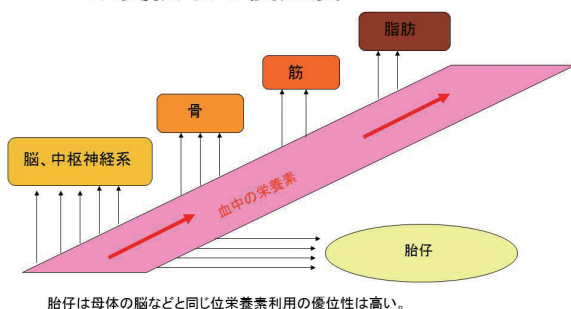


表1 繊維供給による死産改善試験

	Control 対照区	Experimental 試験区	P-val
Groups (weeks)	32	32	
母豚数 Number of sows	298	322	
総産子数 Total born per litter	18.4	18.1	0.38
死産割合% Dead born per litter, %	8.7	6.6	<0.001
産乳率% Mortality, birth - weaning, %	14.6	13.7	0.21
死産+産乳中事故率% Total mortality, %	22.3	19.9	0.004
母豚治療率% Medication, % of sows	6.4	5.3	0.66
一頭当たり死産数(A)	1.6	1.2	(0.4頭減少)
一頭当たり産乳事故頭数(B)	2.7	2.5	(0.2頭減少)
合計(A+B)	4.1	3.6	(0.5頭減少)

協会からのお知らせ

今年度の定時総会を開催いたしました

6月12日(水) 午後、東京都千代田区のKKRホテル東京において第15期定時総会(代議員会)を開催され、22名の代議員の出席(委任状含む)のもと前年度事業経過報告、同会計報告および監査報告、役員改定案、今年度事業計画案など全議案が承認されました。会員の皆さんには議案および議事録をお送りしました。

今年度事業の概要は次の通りです。

・協会創立 50 周年記念事業

『日本SPF豚協会 50 年史 - 苦悩と模索の半世紀』(仮題)を発行いたします。9月の記念セミナーまでの完成を目指します。

記念セミナーは9月5日(木)、KKRホテル東京(東京都千代田区)において開催いたします(2~3ページ参照)。

・認定委員会の開催

認定委員会は6、9、12、3月の計4回開催します。

・防疫設備基準、防疫管理基準の徹底

SPF豚農場認定規則及び関連する基準、細則に基づき、厳格な運用を行います。

・SPF豚農場認定細則の整備

認定規則および現状に即した認定基準および細則の整備に引き続き取り組みます。

・認定成績集計結果のフィードバック

SPF豚農場認定申請の際に提出される生産成績を集計して、認定証発行時にこれまでの成績の推移を、また年度末に、各認定項目の順位表を、各ピラミッドを通じて農場にフィードバックします。

・生産成績優秀CM農場の表彰制度の継続

引き続き、総合生産成績および商品化頭数について最も優れた成績を収めた農場を選考委員会により選定、表彰します。

過去の生産成績が、一定期間以上、上位25%に位置している農場には成績優秀の証しとして認定証にAマークを付記します。

・ピラミッド会議の開催

記念事業準備委員会とピラミッド会議を統合し開催します。

・協会だよりの発行と協会ホームページの充実

協会だより75号(4月)、76号(7月)、77号(10月)、78号(1月)を発行します。

また、昨年リニューアルした協会ホームページの活用を強化し、内容を充実させます。

・実験用家畜ブタ生産農場のAW状況調査と啓発

昨年度取り決めた指針に基づき、まず現状について調査します。

・地域研修会と技術懇談会の開催

開催地域、開催時期、テーマ等をピラミッド会議等で検討していきます。

・販促用資材等の提供

店頭用パークリーフレット等を引き続き希望会員に無料で配布します。

・食育等への協力

千葉県の認定農場と協力し、こども食堂へのSPF豚パークの提供を引き続き行っていきます。子どもの食に対する関心を喚起し、他の地域での態勢づくりも検討していきます。

・SPFポークの普及

ホームページや、SNS等の新たな媒体を活用した、認定農場、SPFポークのPRについて検討いたします。

日本食肉センター主催「ちくさんフードフェア」への10回目の出展を予定しています。また、負担の少ない形で参加できるイベントがないか情報収集します

認定農場の直売やネット販売等の状況、SPFポーク販売店の情報について収集・整備し、正しい情報をホームページ等で提供していきます。

○代議員・理事の交代

九州地区選出代議員の林洋一氏(株)JA北九州ファーム)が辞任、新留札男氏(有)新留養豚)が就任いたしました。また、シムコピラミッド選出の代議員および理事が、鈴木保氏から増穂賢志氏に交代いたしました。

○ピラミッドの統合

伊藤忠飼料ピラミッドがシムコピラミッドと統合され、同ピラミッドの全傘下農場がシムコピラミッドに移管されました。5生産ピラミッド体制となり、伊藤忠飼料ピラミッド選出の代議員および理事の上野啓介氏が退任されました。

プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPF豚と 白身魚の ハイブリッド天ぷら

●レシピ提供・和顔 本館 鶏魚楼

料理長 鈴木英義 (北海道札幌市)

今回のレシピは豚肉と魚という一見相反するものを一体化させ、双方のよさを引き立て合うというもの。まさにハイブリッドな逸品です。下処理をきちんとするのがおいしさの秘訣のようです。ぜひお試しください。

●材料● (1人前)

- ・ SPFポーク ももスライス (1~2mm) 6枚
- ・ 白身魚 (タラなど) 30g 3貫
- ・ しば漬けなど 適量
- ・ 小麦粉 少々
- ・ 天ぷら粉 適量
- ・ 揚げ油 適量

●つくり方●

- ① お湯を沸かし、塩とお酒 (分量外) を入れ、沸騰したら10秒程度白身魚をくぐらせます。取り出したらしっかり

水気を切っておきます。

- ② スライス肉に小麦粉をまぶし、①としば漬けを乗せて巻きます。1貫30gに対して肉2枚を使用します。
- ③ ②を分量の水で溶いた天ぷら粉につけて180℃の油で3分揚げます。
- ④ 食べやすい大きさに切って器に盛って完成です。

★鈴木シェフからのアドバイス

魚のくさみをとるために、熱湯にくぐらせるのがポイントです。塩、ポン酢などお好みで召し上がってください。

認定情報

●令和元年6月認定農場

(有効期間：令和元年6月6日から2年6月末日まで)

北海道・鈴木ビビッドファーム、青木ピッグファーム(株)、(有)フロイデ農場、岩手県・全農畜産サービス(株)東日本原種豚場、(株)のだファーム第一農場、秋田県・全農畜産サービス(株)秋田大仙SPF豚センター、福島県・(有)東和牧場、茨城県・(有)弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、(有)篠崎畜産、群馬県・JA東日本くみあい飼料(株)利根スワインセンター、利根沼田ドリームファーム(株)、(株)畜産経営研究所前橋農場、千葉県・(株)ユウアイ、高橋幸雄養豚場繁殖農場、同肥育農場、(有)ピギー・ジョイ第1農場、木内養豚第1農場、同第2農場、石毛宏司養豚場、塚本利昭養豚場、宮澤泰徳養豚場、

吉田道養豚場、岡山県・岡山JA畜産(株)荒戸山SPF農場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、愛媛県・富永養豚、(株)多田ファーム、JA西日本くみあい飼料(株)愛媛養豚実証農場伊予スワインガーデン、(株)多田ファーム天貢農場、佐賀県・JAさが天山ファーム、長崎県・(株)伊藤ファーム、濱田養豚、JA全農長崎県本部五島種豚供給センター、宮崎県・(有)レクスト繁殖農場、同肥育農場、ジャパンミート(株)川南農場、ジャパンミート(株)御池農場、クリーンファーム(株)、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場、(有)さつま農場、(株)かいたく大口農場(以上42農場)

※次回認定委員会は9月19日(木)の予定



永野雅彦さん
(広島県三次市・
島根県浜田市)

**科学者にして哲学者
豊富な知識と合理的な思考で、
確かな経営**



浜田市内にある直営レストランで広島ポークの従業員の皆さんと。前列中央が永野さん

永野雅彦さんは1944年生まれ。島根県で約50年養豚業を営み、40年前に海外から豚を導入したハイブリッド養豚の先駆者です。当初よりSPF豚にも興味をお持ちだったそうですが、飼料会社の紹介で広島県にSPF豚農場を新設、5年前から認定取得されています。

永野さんは開拓農家の長男、子どもの頃から畑作を手伝い、鍛えられたそうです。当時ではめずらしい一人っ子、両親ともにグルメで「ひもじい思いはしたことがないですね」。大事に育てられたとお見受けしました。お父さんが狩猟もされたこともあり今というジビエ料理も含め、幼いころからおいしいものを食べてきた確かな舌をお持ちのようです。

一人息子として家を継ぐのは当たり前だと思っていた永野さんですが、その前に「世界中を見てみたい」と目指したのは船乗り。水産高校を卒業後、貨物船やタンカーで7年間、世界中を航海したそうです。

その経験が経営者としての永野さんを支えます。なぜなら「エンジニアだから。船の機関士は燃料効率計算から安全性の確保まで、何でもこなさないとイケない。合理的な思考が重要です」。養豚も同じこと、とおっしゃいますが、すべて独学。研修先で5年分の養豚雑誌に全て目を通し、技術本の書き写しも。飼料設計から豚舎の設計まですべて自分のものに。英語力を生かし海外情報にも精通しました。

「一番大事なものは豚を見る目を養うこと」。小さな新聞記事も見逃さず、国の内外を問わず豚を見に各地を回ったそうです。「100点

満点をとることより、安定して80点をとるにはどうすればいいかを常に考えました」。

広島ポークの経営理念も同じ。1000頭規模の農場ですが、「思い通りの農場ができました」。今は月に1度、指導に赴きます。スタート時から成績は高位安定、全国でも屈指の高成績認定農場です。従業員は14人、若い人が多いのが印象的でした。

大変な読書家の永野さん。早朝の読書が日課でジャンルは様々、ホモサピエンス論、宇宙理論まで及びます。かつて道元の『正法眼蔵』を20年間、毎日欠かさず読んだこともあるそうです。まさに「科学者にして哲学者」です。

「寝ること、食べること、体を動かすことが大好き」という永野さん。おいしいものを求めいろんなところに足を運ぶそうですが、永野さんの本物の舌を満足させるところはなかなかないとか。ならばと、20年前から浜田市内に自農場産の豚肉を提供するレストランを経営。メニュー等もすべてご自身で考案されるそうです。特に運動もしていないとのことですが、引き締まった体型は若々しく、ダンディそのもの。颯爽としておられます。

地元で知り合い「いつの間にか一緒になっていた」(永野さん)、50年近く連れ添う京子夫人との間に一男一女をもうけ、孫もお二人。自ら英訳し農場入口に掲げている、有名なサムエル・ウルマンの詩「青春」そのもののような永野さん。老いとは無縁の、知性と経験に裏打ちされた言葉の数々が胸に響いて、またぜひお会いしたくなる魅力あふれる方でした。(編集部)

編集後記

豚コレラ、PEDが一向に収まらないのは何故? 不可抗力、それとも人災? 有効な手立ては何? 何だか釈然としない毎日ですね。さて、鈴木氏の特集記事にもあるように、SPFエリア出入りの際のシャワーイン・シャワーアウトは農場従事者の意識を変革させたと思います。しかし…、まだまだ温度差が感じられます。確かに育種分野の進歩は目を見張るものがあり、養豚産業の在り方を変えていくでしょう。しかし、この果実を確実に収穫するためには、SPF管理が切り離せないと考えられます。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール
このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第76号 2019年7月1日発行(季刊)
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail:j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀